

1993年度高1野外学習まとめ

鈴木 一 悠

【抄録】 '93度高1野外学習が、環境、資源エネルギー、人権福祉をテーマに、3つのコースで行われた。社会科、理科合同で企画した。得られた成果は充分とは言えない。掲げた目標の達成は、一回の野外学習に求めるのではなく、日々の授業の中にこそ求めるべきである。

【キーワード】 環境 資源エネルギー 人権福祉

はじめに

'93年度野外学習が行われた。実施の目的、方法とも前年にならったものであった。'94年度から高校の教育課程が変わる。高校野外学習が引続き行われる場合、実施の目的、方法ともこれまでとは変わったものとなる。'93年度に行われたものを、本校で行われた高校野外学習の1つの例として記録しておきたい。

準備

実施に到る準備過程を、日を追って、略記する。

○5/13 第1回社会科・理科合同科会

ここで、次の事柄が合意された。

1. 行事の性格は、「学校行事である」とする

企画運営は、社会科、理科で行う

引率は、社会科、理科、学年団で行う

2. 目的

生徒一人一人が自分の身の回りの自然、社会を実地に見て、自分の置かれた立場、将来を考える。

3. 形態

1学年を3～4グループに分けて行う、グループ学習の形態をとる。クラスを解体し、生徒は所属グループを選択する

4. テーマ、見学地の決定

社会科、理科でテーマを1～3個に絞り込む

見学地についても社会科、理科で3～6個所に絞り込む

コースについても社会科、理科で3～4に絞込む

5. 進め方

高1学年の他の行事とは直列に、短期集中の形で進める

形態、テーマ・コース・見学地を教官側で設定するという実施方法は、次年度以降の前例としない

○6/10 第2回社会科・理科合同科会

1. テーマ、コース、見学地の絞り込み

テーマとして、エネルギー、環境、資源、福祉が挙げた。

コース・見学地として、南陽工場－藤前干潟－アルミ缶回収センター（コース1とする）、浜岡原子力発電所（コース2とする）、ゆたか作業所（コース3とする）が挙げた。この場合、分担は、コース1とコース2は理科、コース3は社会科とすることになった。

2. これからの進め方

下見・見学地責任者との打合せを行っておくべきこと

オリエンテーション、事前学習準備を夏休み中に行っておくべきこと

オリエンテーション、事前学習の実施は、文化祭終了次第始めること

研究協議会当日が、ちょうど、事前学習の期間内に入るように進めること

が合意された。

3. 実施上の留意点

生徒のコース選択については、第2希望まで尋ね教官側で人数調整をする。そして、コースによる参加人数の多い少ないの差があまり大きくならないようにする

利用交通機関は、チャーターバスとする

費用の負担は、コースによらず生徒1人当たり同額とする

ことが合意された。

○オリエンテーション

9月に入ってから、野外学習の全体計画を用意した印刷物にしたがって、野外学習のテーマ相互の関係をやはり用意した印刷物にしたがって、訪問地について

の概略をパンフ抜粋などによって説明した。いずれも埋科1の授業時間の一部を用いた。

○希望調査

9月末、オリエンテーションの最後にコースの希望調査を行い、人数調整を教官側（コースごとの責任者3名）で行った。（コース3には、第2回社会科・埋科合同科会と希望調査との間に、訪問地として裁判所が加わっていた。）調査結果は、第1希望について、コース1・26名、コース2・30名、コース3・77名となった。コース3については、ハスの定員、教室の収容能力（研究協議会当日、普通教室で公開授業として、事前学習の状況を見て貰うことになっていた）から50名とし、これを越える人数は第2希望にしたがって、コース1またはコース2に回って貰うことにした。結局コース1・40名、コース2・44名、コース3・50名となった。

○10/4 LT コースごとの集まり

この集まりでは、班の編成をまず行った。次いで班ごとに、訪問地で何を最も見て来たいのか・調べて来たいのか、事前研究のテーマ、事前研究の方法を話し、最後に役割分担を行った。役割は、グループ代表 公開授業発表代表、事後まとめ代表が必ず含まれるようにした。

結果を概略記すと次のようになる。

班の数は、コース1では9、コース2では7、コース3では11。コース1 グループ1 班の人数：6 事前研究のテーマ：ゴミはとれ程出るのか。ゴミはどう処分されているのか。ゴミはなぜ出るのか、事前研究の方法：図書館で調べる グループ2 班の人数：5 訪問地で最も見て来たい事柄：野鳥園。鳥がどのくらい減ってしまったか、事前研究のテーマ：環境破壊の実態 事前研究の方法：図書館などで資料を集める

グループ3 班の人数：3 訪問地で最も見て来たい事柄：資源のリサイクルはどう行われているのか 事前研究のテーマ：Love and Peace 事前研究の方法：まず調べ頭にたたきこむ など

コース2 グループ1 班の人数：8 訪問地で最も見て来たい事柄：原子力発電の安全性と実用性を調査する 事前研究のテーマ：未来に原子力発電は必要か

事前研究の方法：危険なだけとそれが必要かエネルギー面を主に研究を進めてゆく グループ2 班の人数：6 訪問地で最も見て来たい事柄：原子力発電の廃棄物はどうなるのか。原子力発電のメリット、デメリット。原子力エネルギー発生のしくみ 事前研究のテーマ：原子力発電のメリットとデメリット 事前研究の方法：資料（本・パンフレット）を集めま

める グループ3 班の人数：5 訪問地で最も見て来たい事柄：エネルギー供給量増加による安全性の減少はありえるかどうか 事前研究のテーマ：中性子発生の原理の研究 事前研究の方法：資料を集める など

コース3 グループ1 班の人数：5 事前研究のテーマ：ゆたか福祉会の歴史 グループ2 班の人数：4 事前研究のテーマ：障害者の発達と労働 グループ3 班の人数：5 事前研究のテーマ：障害者の職場の民主主義 など

○10/7 附属の時間

研究班ごと研究テーマに合う事前研究を行った（図書館）

○6/11~10/12

この間に訪問先へ見学依頼状を提出した。

○10/21 高1野外学習実施案を教官会議に提出した。

○10/25 第4、5、6限

研究班ごとに公開授業発表の原稿作成を行った。

○10/29 第6限

研究班ごとに公開授業発表の原稿作成を完成をめざして行った。

○11/2 研究協議会

公開授業で、事前研究で知り得たこと・考えたことをコースごと、班ごとに発表した。

○11/4 保護者に向けて、高校1年野外学習案内状を配布した。

○11/15 LT

コースごとに、実施上の事前注意をした。

実施

期日 11月17日

訪問地 名称を正しく所在地とともに記すと

コース1 (株)新菱アルミ缶回収センター中京工場(愛知県海部郡弥富町大字稲元宇辰巳田53)・愛知県弥富野鳥園(愛知県海部郡弥富町大字上野2番10)・名古屋市環境事業局南陽工場(名古屋市港区藤前二丁目101番地)

コース2 (株)中部電力浜岡原子力発電所(静岡県小笠郡浜岡町佐倉5561番地)

コース3 社会福祉法人ゆたか障害者労働福祉センター(名古屋市南区泉楽通四丁目5番地3号)、名古屋地方裁判所(名古屋市中区三の丸一丁目4番1号)

日程概要

コース1 8:30 学校出発 10:00~10:45 回収センター見学 11:00~11:45 野鳥園見学 12:00~13:00 稲永公園で藤前干潟見学・昼食 13:15~14:00 南陽工場見学 15:50 学校帰着
 コース2 8:00 学校出発 10:30~14:00 発電所見学・昼食・見学 17:30 学校帰着
 コース3 9:00 学校出発 10:00~12:00 福祉センター訪問 13:00~15:00 裁判傍聴 15:50 学校帰着

引率

コース1 高須明(理科) 鈴木一悠(理科、学年団) 井上一博(社会科講師)
 コース2 原英俊(理科) 斉藤真子(学年団)
 コース3 川田基生(社会科) 長岡咲子(学年団) 川合勇治(学年団)

参加 体調不良などで当日欠席の者4名を除く130名、スウェーデンからの短期留学生1名の計131名

事後まとめ

○11/18 附属の時間 第1回報告集原稿作成

まとめるべき事柄を

事前研究で分ったこと・知り得たこと・考えたこと
 訪問地で分ったこと・知り得たこと・考えたこと
 野外学習を行って感ずること

の3つとした。

○11/19 第4限 LT 第2回報告集原稿作成

どんな報告がなされているかについては、実際の報告集をみて欲しい。

最後に、報告集の「はじめに」として載せた文章を再録したい。企画運営をした者を代表して、高1野外学習全体を要約して書いた積りである。

「高1野外学習が1993年11月17日に行われた。コースは3つあり(1)(株)新菱アルミ缶回収センター中京工場・愛知県弥富野鳥園・名古屋市環境事業局南陽工場、(2)(株)中部電力浜岡原子力発電所、(3)(法)ゆたか障害者労働福祉センター、名古屋地方裁判所であった。生徒1人1人がこれら3つのコースのいずれに参加するかは、希望に基づいて教官側で決めた。またコースそのものも、教官側で設定した。3つのコースを束ねるテーマは、環境問題、資源エネルギーの問題、人権福祉の問題である。環境問題と資源エネルギーの問題とは関連しており、

後者が前者を引き起していると言える。環境問題は現在深刻さを増す一方であり、人間がこの問題の解決に成功するかどうかが、人間だけでなく地球全体の命運を決めようとしている。人間という生物の根源から発している問題で、解決に向けた努力の成否は予測できない。1990年版地球白書には「2030年までに解決できなければ」と記されていたが、現在はすでに手後れなのかも知れない。人権福祉の問題は人間内部の環境問題である。コース内で設定した訪問地は、いずれも点と言えるような小さな場所ばかりだが、生徒1人1人に現在自分達が置かれている状況を知ってもらい考えてもらう例として選んだ。今回の野外学習を機に自分の身の回りについて、人間という生物について認識を深めてくれることを期待している。また、訪問地の働く人達が快く職場を見せてくれたことに生徒諸君は感謝して欲しい。

報告集ができた。事前研究で知り得たこと、当日分ったこと、感じたことの思いのたけが書かれているのだと思う。通読して欲しい。原稿の監修役を引き受けたが十分にできたとは言えない。」

おわりに

社会科・理科合同科会から始まって報告集の発刊をもって野外学習が終った。'93年度の高1野外学習には、準備段階の一部を研究協議会で見て貰うという要素が加わった。このことは、野外学習の内容をよくする方向で作用したのか、悪くする方向で作用したのか。

企画運営をした者には、'93年度高1野外学習は他の仕事と平行して準備、実施しなければならず、誠に忙しい行事であった。方法に到っては作りながら実行するという部分もあった。しかし概ね、設定した目標、方法にしたがって実行したと考えている。さて目標はどれ程達成されたであろうか。高校1年生1人1人の中に何程のものを残し、何程の意識の変革を起し得たであろうか。報告集編集後記を読む限りでは、記定した目標と得られた収穫との間の大きな落差を感じざるを得ない。このことは、目標達成を一回の野外学習に求めるのではなく、毎日毎日の授業の中にこそ求めるべきであるという、企画運営する者の自省材料とすべきものであろう。

引率者の規模については、教官会議の席上少なすぎるとの批判意見が出された。野外学習充実と当日の他学年の授業充実とのせめぎ合いの中で導き出した規模であったが、「野外学習は年1回の行事、授業は年に何十回とある」という批判意見には、傾聴されてよい重みがあった。